1997.11.22・24号

NEVER・・・

編集：五味亜矢子・松浦千恵美
藤原夕

11／24(月) 1部－2部入替戦

12:00 KICK OFF

日本体育大学
VS
青山学院大学

14:00 KICK OFF

早稲田大学
VS
慶應大学

11/22(土) 2部－都県入替戦

12:00 KICK OFF
東京学芸大学 VS 立正大学

14:00 KICK OFF
東京農業大学 VS 東海大学

入替決定方法

日体大(1部8位)VS青学大(2部1位)
【日体の勝】
日体は1部、青学は2部にそれぞれ残留
【青学の勝】
日体は2部降格、青学は1部昇格
【引き分け】再試合＊
【再試合・再度引き分け】それぞれ残留

早稲田大(1部7位)VS慶應大(2部2位)
【早稲田の勝】
早稲田は1部、慶應は2部にそれぞれ残留
【慶應の勝】
早稲田は2部降格、慶應は1部昇格
【引き分け】それぞれ残留

学芸大(2部8位)VS立正大(都県1位)
【学芸の勝】
学芸は2部、立正は東京都1部にそれぞれ残留
【立正の勝】
学芸は東京都1部降格、立正は関東2部昇格
【引き分け】再試合＊
【再試合・再度引き分け】それぞれ残留

東農大(2部7位)VS東海大(都県2位)
【農大の勝】
農大は2部、東海は神奈川県にそれぞれ残留
【東海の勝】
農大は東京都1部降格、東海は関東2部昇格
【引き分け】それぞれ残留

＊再試合＊1－2部、2部－都県双方とも
再試合となった場合
11/26(水) 西が丘サッカー場にて
13:00～学芸大VS立正大
15:00～日体大VS青学大
どちらか一方の場合は13:00開始

「何か」が起こる予感は十分に持てた。13年振りに出場した総理大臣杯では３位の好成績。敗れた準決勝は駒大に２点先行し、ＰＫ戦までもつれた試合だった。

リーグに自信を持って臨める、と選手も感じたはずだったが、目標とする“つなぐサッカー”が実践できたのは開幕戦の開始15分だけだった。ディフェンディングチャンピオン・早稲田と引き分けたものの、２節の駒大戦では総理杯の借り――結果的には駒大が勝ったにもかかわらず、ＰＫ戦まで苦しめられた借り――を返そうとする相手の意気込みの前に１－５と大敗。春から積み上げてきた自信が脆くも崩れ去り、それとともに積極性をも影を潜めてしまった。

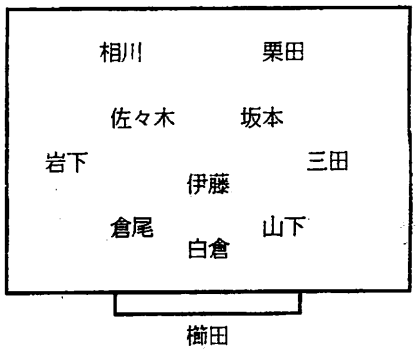
シーズン前に様々なシステムを試み、３－５－２の攻撃的な布陣でリーグを戦った。しかし、パスに正確性を欠くうちに中盤を相手に支配され、攻撃はカウンター頼りに。相手によって３トップにするなど、メンバーやフォーメーションを変えて臨んだが、結果的には７得点21失点。11相川は、中盤で核になろうとするがゆえに、点取り屋としての長所が表に出なかった。「シュートにいくことの大切さを学んだ」はずの10坂本も、なかなかシュートを打つ場面がなかった。

４年連続の８位、つまり４年連続の入替戦。選手たちが“入替戦慣れ”してしまっているのが、今年は吉と出るとは限らない。カギは、自信と積極性を取り戻しているかどうかだろう。点を取らなければ勝利はない。ある意味では「今後」が問われてしまう運命の入替戦である。今まで以上の粘りが必要だ。

日本体育大学

＊最近４年間の成績＊

'94　１部リーグ８位(１勝６敗)
　➡入替戦 VS 日大
　　１－１、再試合０－０で残留
'95　１部リーグ８位(１勝６敗)
　➡入替戦 VS 専修大
　　２－０で勝利し残留
'96　１部リーグ８位(３敗４分)
　➡入替戦 VS 亜細亜大
　　０－０、再試合０－０で残留
'97　１部リーグ８位(５敗２敗)
　➡入替戦 VS 青学大



日本体育大学　VS　青山学院大学

春の関東選手権でＰＫ負けして以来、天皇杯予選決勝で横河電機を破るなど公式戦負け知らず、しかも１試合平均３得点を上回るという昇り調子でリーグ戦に突入した青学。勢いをそのままに５連勝、勝てば優勝を決めるはずだった６節で日大に逆転負けして不覚を取ったが、翌日２位の法政が敗れたことで優勝を決めた。

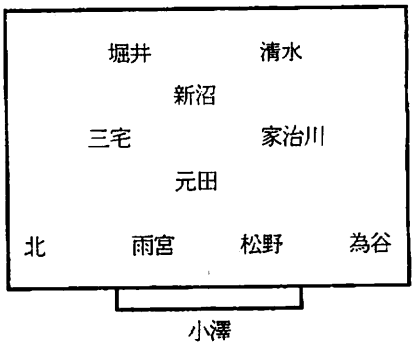
基本的な技術の高さに加えてコンビネーションと個々のアイディアが噛み合い、２部の中では抜きん出た実力を発揮した。武器は何といってもその得点力。リーグ７試合で合計16得点、しかも得点者は８人と、どこからでも点の取れる幅の広さが魅力だ。スピードのある２トップに中盤からのミドルシュート、８新沼のラストパスとボランチ10元田から左右への的確な展開、両サイドバックのオーバーラップ、３雨宮、25松野はセットプレーで攻撃参加と、ＧＫ以外のすべてのプレーヤーが攻撃に加わる。昨年まではリーグ特別視するあまり、プレッシャーに潰された２カ月を送っていたようだ。メンタルトレーニングが功を奏した今年は、全員が楽しくプレーしている。攻撃力と勢いという点で考えれば、間違いなく青学が上回っている。

リーグ前の天皇杯予選で大活躍した11清水がリーグではわずか１得点と、その得点力がカゲを潜めていること、リードしたあと追い上げられて終わる試合展開が多過ぎることが少々気にかかるが、リーグで無得点試合はない。入替戦は天皇杯への、そして来年への通過点だという雰囲気にあふれ、リーグ後の練習試合もプロ相手に行なってきた。この強さが本物なのかどうか。この試合で問われる。

青山学院大学

＊最近４年間の成績＊

'94　２部リーグ４位(３勝３敗１分)
'95　２部リーグ６位(２勝４敗１分)
'96　２部リーグ５位(２勝２敗３分)
'97　２部リーグ１位(６勝１敗)
　➡入替戦 VS 日体大



30ページ

屈辱のシーズンだった。「まさか、まさかが重なってしまった」という松永章監督の言葉が表すように、今季の早稲田はチームとしてのリズムが作れないままに、創部以来初の入替戦出場という結果を生んでしまった。

今リーグで懸念されていた戦力ダウン――リーグ戦未経験の選手の多さからくる不安定な戦力――特にＤＦラインの弱さや攻撃陣の決定力不足、守備的な中盤など試合を重ねるたびに弱点が露出してきてしまったように思える。リーグ中盤からボランチの５石本を中盤のトップに上げ、７西脇をボランチに下げて中盤のチェックの活性化を図ったり、ＤＦへコンバートしていた11須賀井を前線に戻して攻撃力を上げようとしたものの、時すでに遅かった。

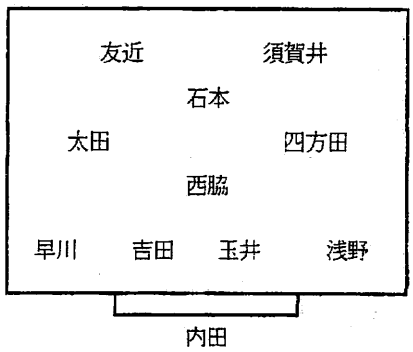
「慶應は全体的にプレスが早く、フィジカル的にも強い」と松永監督は分析し、特に気をつけている選手として得点力の高いＦＷ飯島の名を挙げた。これに対し、スピードとパス…いわゆる足技勝負で活路を見いだそうとしている早稲田。ＤＦラインを固めるだけでなく、攻撃的な姿勢、中盤からの展開を形づくれなければ、混沌とした状況からの突破口は開けない。

例年、この時期は国立競技場の芝を踏んでいる早稲田。歴史ある定期戦を組む慶應大との「入替早慶戦」に挑むことになってしまった今季の早稲田魂が、上昇気流にある慶應大をどれだけくい止めるか。歴史に残る勝負、そしてそれは負けることは絶対に許されない試合。松永監督の采配に期待したい。

早稲田大学

＊最近４年間の成績＊

'94　１部リーグ３位(３勝２敗２分)
'95　１部リーグ３位(３勝２敗２分)
'96　１部リーグ１位(６勝１分)
'97　１部リーグ８位(１勝４敗２分)
➡入替戦 VS 慶應大



早稲田大学　ＶＳ　慶應大学

５位で迎えたリーグ最終戦。その時点では４点差以上の勝利でも、次の試合の結果を待たなければならず、ただひたすら得失点差を広げて勝つことに焦点が当てられた。前半１点リードされたものの、後半に猛反撃。45分間で７点を奪って劇的な勝利。その途切れぬ闘志と入替戦に賭ける執念は、駒沢競技場にドラマをもたらした。

けれど、それまでの戦いぶりは決して安定したものではなかった。前線からのチェック、５梅原を中心とした最終ラインのディフェンスは、よく守ったが、ボールを奪った後の展開に課題を残す。全体的に意図のあるプレーは随所に見えるのだが、ＦＷとの連係を含め、パスミスや状況判断の遅さは否めず、その「意志」を具現できるまでには至っていない。また、２点差以上の勝利は１戦だけと、どんな相手に対しても同じリズムで戦ってしまう、余裕のなさも見えた。

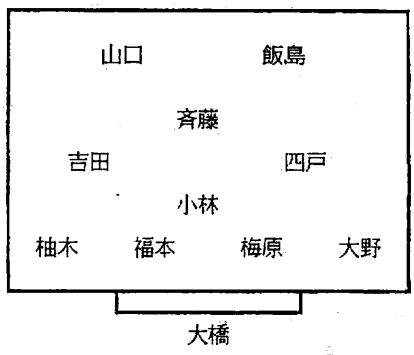
引き分けは負けに等しい１部との入替戦ではアグレッシブに戦うしかない。７四戸、９吉田の突破が攻撃の起点となるが、孤立させず、コンビネーションプレーでフォローしたい。リーグでは決定力に物足りなさを感じたエース10飯島、また途中出場に終始したが、勢いのあるルーキー14戸塚にも、その得点力に期待がかかる。

強い精神力と粘り強さは、リーグで存分に見せてくれた。戦う気持ちでは引けを取らないはずだが、個人の技術で優る早稲田に対して、どれだけ数的優位をつくり、組織で対抗できるか。かつ、早稲田の出方を見ながら冷静に、自分たちから仕掛けていくことができれば、勝機はある。「早慶戦」という、単なる１試合以上の意味を持つかに見えるこの入替戦に、その冷静さを望むのは酷なことなのだろうか…。最後は「自分」との戦いだ。

慶應大学

＊最近４年間の成績＊

'94　１部リーグ７位(４敗３分)
➡入替戦 VS 明治大
１－３で敗退し２部降格
'95　２部リーグ３位(３勝２敗２分)
'96　２部リーグ４位(３勝３敗１分)
'97　２部リーグ２位(４勝２敗１敗)
➡入替戦 VS 早稲田大



東京学芸大学　ＶＳ　立正大学

湯田監督新体制のもと新たなスタートを切った今季の学芸大だったが、リーグ戦では何と一つも勝ち星を挙げられないまま、全敗で２年連続の最下位となってしまった。

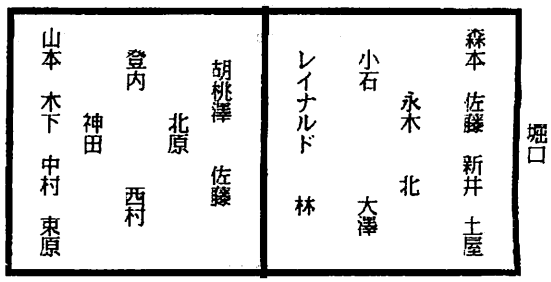
ディフェンシブな戦いから活路を見い出すリアクションサッカーがメインである、と湯田監督は語っていたが、このサッカーを具現化するために必要な攻守の切り換えの早さが、殊にリーグ前半戦で見えなかったのが、戦いを苦しくした一因であろう。３－５－２の体制は取っているのだが、両ウイングバックがなかなか攻撃に加わることができなかった。ディフェンシブな面ばかりが目立ってＤＦは５人が並んでしまい、さらに中盤の２人が引いて来る。これで攻撃の枚数が絶対的に足りなくなり、中盤を相手に支配されるためにじっくり攻められ、ＦＷは孤立してしまった。

３節からエースの11佐藤が復帰、また手術で２年以上のブランクがあった10西村も徐々に長い時間ピッチに立つようになり、５節からはバックラインを４人にしてチームが安定してきた。ラインの上げ下げを素速く行い、前線からチェックをかけてボールを奪うと前に枚数をかけられるようになり、攻守のバランスが整ってきた。スピードの佐藤と高さのある９胡桃澤の得点力に期待がかかるが、パッサーとなる７北原の調子が重要なポイントとなる。また、立正の左右からのスピードある突破を抑えられるかどうかが課題だろう。

こちらも、「どちらかといえば守備のチーム」(秋山監督)という立正大。今年の東京都１部リーグでは、６試合で14得点３失点。５勝１敗で優勝を勝ち取った。

トーナメント方式から２ブロック総当たり方式に変わった関東大会は２－０、５－１、２－０と危なげなく勝ち上がってきた。ＧＫの主将・堀口を含め、上級生が安定した守備を見せる。基本的には５永木と13北のダブルボランチで、中盤前の左14大澤と右11小石の２年生コンビが攻撃の核となる。小石は小柄だがスピードとテクニックを持っており、チャンスメークに活躍しそうだ。ＦＷは７レイナルドと10林が務める。レイナルドの決定力が上がれば相手には怖い存在だが、突破もできボールさばきもできる林に期待がかかる。

入替戦は、やはり学芸大と対戦した３年前以来。その時は１－１の引き分けで昇格は成らなかった。現在の４年生が１年生の時だが、「雪辱戦というような気持ちは全くない。リーグ、関東大会に続く“３冠目”を目指して、専らチャレンジしようという雰囲気」(秋山監督)。勢いが武器となるか。



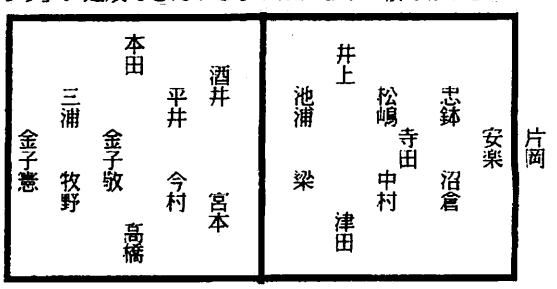
東京農業大学　ＶＳ　東海大学

３年振りに総理杯出場を果たした農大だったが、リーグは初戦でつまづいた。決定力のなさから得点できず、ロスタイムに与えた間接ＦＫからの失点で敗れた。その後あっという間に４連敗。その間１得点という攻撃陣の不振が響いた。

組織的な守備から素速い攻撃につなげる形を目指したが、守備の薄さが気にかかる。ＧＫ長谷川が決定的なシュートをかなり防いだが、ＤＦの裏をこれだけつかれては失点を重ねるのも仕方がない。中盤でのチェックを徹底し、スペースへのパスを未然に防がなければ失点は減らせない。左右のウイングのスピードを最大限に生かす展開が特徴の東海との対戦となったことで、４バックあるいは５バックとして左右の守備を厚くしてくる可能性もある。

関東選手権で対戦した春は、東海が主将の寺田をユニバ代表で欠いており、攻撃の組立てを許さず２－０で快勝している。昨年、２部得点王を獲得した11酒井の調子が戻らないままだが、守る入替戦という立場のためしっかりと守備をしてカウンターというシンプルな攻撃に集中すれば、本来の得点力も蘇るかもしれない。

下部リーグとの入替戦は、現役選手たちは初体験。試合の１週間前まで相手が決まらないという、精神的に集中し切れない状態での調整に不安が見えた。下との入替戦は、よりモチベーションの高め方が難しいのは確かだが、彼らがこの一戦に何を賭けてくるだろうか。見ものでもある。

関東リーグへの返り咲きを目指した昨年の挑戦は、日大に１－２と跳ね返された。ボランチの６寺田を攻撃の起点とする戦術をより一層追及し、今年も神奈川県リーグを５勝１分で優勝して関東大会に勝ちあがってきた。

関東大会では同ブロックに実力校が集中して苦戦。国際武道大の速いカウンター攻撃に苦しみドローを喫したが、昨年入替戦に出場した拓大に快勝して入替戦切符を手に入れた。立正大との決勝は寺田を累積警告、他にも３人ほどケガで欠き、中盤でのパスミスをことごとく拾われたことと、ゴール前で決定力を欠いて０－１で敗れた。寺田を司令塔に左26津田、右45井上を走らせ、10梁に放り込む。特徴の両タッチラインぎりぎりまで使ったサイド攻撃は、しかし単調になると読まれやすい。高さのある９片渕の投入、59中村の飛び出しも絡め、バリエーションのある攻撃を仕掛けられれば勝機は十分ある。宇野監督による今年のテーマは「逞しいチームになろう」。達成できたかどうかは、この一戦でわかる。